

百葉

Manyoh

立谷秀清・相馬市長がマニフェスト大賞「グランプリ」に！



去る11月14日、「第9回マニフェスト大賞」で、相馬市の立谷秀清市長が首長部門の最高賞である「グランプリ」に輝きました。マニフェスト大賞（審査委員長＝北川正恭・早大マニフェスト研究所所長）とは、政策本位で政治を行う自治体の首長や議会などの取り組みを表彰するものです。福島県内の首長では初のグランプリ受賞となりました。

11月15日には、「毎日新聞」「福島民報」「福島民友」などの新聞で、市長の記事・コメントが掲載されました。また『財界ふくしま』2015年1月号では、市長のインタビューが5ページにわたって掲載されました。



立谷市長は、「市復興計画そのものがマニフェストであり…計画、実行、評価、改善のPDCAサイクルのもと対策会議でチェックしながら進んできたが、多くは市職員の努力の成果。市民の協力と…多くの団体・個人の方々のご支援のおかげ」（福島民友）、「マニフェストは市民との約束。私は実行できることしか書かない。…実現可能かどうか、見極める有権者の眼力がさらに高まってほしい」（福島民報）、と述べられています。

そして12月23日、NPO法人一冊の会の事務所に、立谷市長から御礼状が届きました。そこには、「復興計画の策定責任者は市長である私ですが、今回の受賞については、市民の

協力をはじめ、各自治体から派遣頂いた応援職員と市職員の努力、そして何より震災発生以来今日まで多くの皆様から頂いた温かいご支援とご協力の賜であります。ここに改めて深く御礼申し上げます」と感謝の言葉が綴られ、また、「相馬市民であることに誇りを持てる相馬市の創造、力強い復興と安心して子育てができる新しい相馬市の実現に向け、みなで努力を重ねてまいります」との力強い決意が書かれていました。

この御礼状を読んだ大槻明子会長と小山賀子理事長は早速、翌日、相馬市へと車を走らせました。そして相馬市役所を訪れ、グランプリ受賞への喜びと御祝いの言葉、そして今日まで共に歩ませて頂いたことへの感謝の気持ちを述べました。



私たち一冊の会は、会員の皆様のご協力のもと、震災発生直後から今日まで、90回にわたり東北八戸から茨城県の大洗町までを訪問して、支援物資を寄贈して参りました。特に相馬市には、「雪香灯」の贈呈（災害公営住宅「相馬井戸端長屋」に2012年設置）、またアフリカ・レソト王国と相馬市との国際交流などを行ってきました。その度に立谷市長のリーダーシップ、市役所や市民の方々の活発な復興活動に触れてきました。私たちにできることは微々たることかもしれませんが、これまで常に立谷市長と相馬市民に心を寄せ、共に歩ませて頂いたという思いがあります。この度の立谷市長のグランプリ受賞は、私たち一冊の会にとっても、我が事のように喜ばしく、そして誇りでもあります。

これを機に、さらに立谷市長と連携を深め、相馬市の復興に向け邁進してまいります。

来年も引き続き、会員の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

謹啓 霜寒の候、貴職にはますます御清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、去る十一月十四日、六本木アークヒルズアカデミーホールにて行われた第九回マニラエスト大賞受賞式にて、相馬市が首長部門の最高賞である「グランプリ」を受賞いたしました。

この度の受賞は、相馬市の復興計画とその実行について高く評価されたものであります。復興計画の策定責任者は市長である私ですが、今回の受賞については、市民の協力をはじめ、各自治体から派遣いただいた応援職員と市職員の努力、そして何より震災発生以来今日まで多くの皆様から頂いた温かいご支援とご協力の賜であります。ここに改めて、深く御礼を申し上げます。

本市の復興は、概ね計画どおり進捗しておりますが、まだ遠半ばでございます。私達相馬市民一同、復興の将来像である「相馬市民であることに誇りを持てる相馬市の創造」、「力強い復興と安心して子育てができる新しい相馬市」の実現に向け、みなで努力を重ねてまいりますので、今後とも温かくお見守りくださいますようお願い申し上げます。

結びに、貴職のますますの発展を祈念申し上げ、略儀ながら書中をもちまして、受賞の報告と御礼のご挨拶とさせていただきます。

平成二十六年十二月吉日

敬具

相馬市長 立谷秀清

文責 石田尊昭副理事長